

報道関係者各位

**パキスタン水害被災者支援**  
**セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン 11月13日から日本人スタッフ現地入り**  
**被災から3ヶ月、子どもたちの心身の安全に懸念**  
**子どもの生活支援と保護事業を開始**

社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン

子どもたちのための民間の国際援助団体(NGO)の社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン(理事長:上野昌也/理事・事務局長:渋谷弘延、以下SCJ)は、パキスタン北東部のパンジャブ州に日本人スタッフを派遣し、子どもの生活支援と保護を目指す新事業を11月10日より開始します。(スタッフは11月13日に現地入り予定。)

パキスタンでは、今年7月から続いた長雨に伴う洪水により、死者1,600人、被災者2,000万人(うち1,000万人が子ども)という甚大な被害がもたらされました(2010年10月26日現在)。セーブ・ザ・チルドレンでは、災害発生直後から被災者への支援活動を行ってきました。しかしながら、9月に独自に実施したフォーカスグループ調査では、子どもたちから、洪水の再発や水に対する恐れ、それに伴う絶望感の訴えがあがるなど、子どもたちの多くが災害の影響によるストレスを抱えていることがわかりました。また、「子どもが親から離れて避難生活に必要な物資の調達に出かけている」、「食糧配布の現場で大人から暴力を受けた子どもがいる」、「被災によりストレスを感じている保護者が子どもに暴力をふるう件数が増加している」など、すべての調査対象グループから「子どもの保護」にかかわる回答があがり、災害発生から3ヶ月が経過してなお、子どもたちが心身ともに危険にさらされていることがわかりました。

このような状況を受け、本事業では、冬期に向けた生活用品の配布をはじめ、心身の危険から子どもたちを守るための場所(子ども広場)の設置・運営、そして、子どもの保護に関する地域社会・政府機関の体制強化を図ります。これらの活動を通し、子どもたちが心身ともに健全に復興へとむかえる環境の整備を目指します。

**<事業概要(詳細は次頁)>**

- ◆支援地 : パキスタン・パンジャブ州
- ◆実施期間 : 2010年11月10日~2011年5月10日
- ◆事業予算 : 約5,500万円  
(ジャパン・プラットフォームの助成による)
- ◆対象人数 : 約20,000人  
(被災した子ども、地域・政府関係者)
- ◆主な内容 : 冬服、学用品・衛生キットの配布、  
子ども広場の設置・運営、  
地域社会・政府機関の子どもの保護体制強化



写真: 避難民キャンプで食糧配布を待つ子どもたち

**本事業を担当するスタッフへのご取材も承ります。広報担当者までご連絡ください。**

**■セーブ・ザ・チルドレンとは**

1919年設立。数少ない団体にだけ認められた、国連経済社会理事会(UN ECOSOC)のNGO最高資格である総合諮問資格(General Consultative Status)を取得しています。現在、世界で29カ国のそれぞれ独立した組織が、パートナーを組み、世界最大のネットワークを活かして、120カ国以上で活動を展開しています。セーブ・ザ・チルドレンはパキスタンにおいて30年以上にわたり活動しており、パキスタン地震(2005年)、パキスタン台風・洪水(2007年)では日本人も現地でも活動するなど長い支援経験を持ちます。本水害にあたっては、発生直後から活動を開始し、10月末現在までに約170万人の被災者に支援を提供しています。

## 【活動内容詳細】

### 活動① 冬服、学用品・衛生キットの配布

冬の到来に向け、特に9歳以下の子どもを対象として冬用の衣類を配布します。また、被災下の子どもを取り巻く環境の改善を目指し、10歳以上の子どもには衛生用品と学用品のセットを配布します。

### 活動② 「子ども広場」の設置・運営

「子ども広場」では、ゲームやスポーツなどの遊びを通し、子どもたちのストレスを和らげ、被災により失われがちな集中力を取り戻すことを狙います。同時に、他の子どもとのふれあいを通し、子どもたちのコミュニケーション・スキルや協調性、想像力などが培われ、被災後・復興期の変化に対応しやすくなることを目指します。

### 活動③ 地域社会・政府機関の子どもの保護体制強化

各コミュニティに「子ども保護委員会」を設置します。「子ども保護委員会」は地域の男性、女性、そして子どもたち自身を含め約10名で構成されます。同委員会は、コミュニティ内の子どもの保護に関する問題の発見と解決に取り組みます。なお、同委員会メンバー、および、社会福祉省、教育省、保健省の関係者に対して、子どもの保護に関する研修を実施し、地域全体の体制強化を図ります。

#### 被災地の子どもたちの声 (2010年9月セーブ・ザ・チルドレン実施フォーカスグループ調査より)

「もうすぐ冬になるけれど、僕は暖かい服を持っていないんだ。お父さんは僕に服を買ってくれるだけのお金はないし、誰が僕に暖かい服をくれるのだろうか」(8～12歳の男子グループより)

「家からとても遠いところにある泉まで水を汲みにいかななくてはいけないの。途中で何が起こるかわからないから一人で行きたくない。親に相談したけれど、兄弟はいないから私が行かなくてはならないの。」(12～18歳の女子グループより)

「川の波の大きな音が怖い。水害の前は、私は大きな音の音楽がとても好きだった。けれど、水害のせいで今は嫌いになりました。」(12～18歳の女子グループより)

「洪水の前は、両親がいろんな話を聞かせてくれたけれど、今は怒った声ばかり聞き、ぶたれたりする。」(12～18歳の女子グループより)

#### 【事業立案にあたった高橋裕子スタッフより】

「被災から3ヶ月が経過し、日本社会の本災害に対する関心が低下している一方で、現地の子どもたちは心身ともに危険にさらされ続けています。子どもたちの声は切実です。今回、日本人スタッフを派遣し、現地における支援活動にあたるとともに、日本の皆さんに現地の状況を明確に報告していくことで、日本社会の理解、ひいては国際社会の支援強化につながることを願っています。」

※高橋 裕子 (たかはし ひろこ)

2010年2月にセーブ・ザ・チルドレン・ジャパンに入局。本事業の東京本部担当として、各種コーディネーションにあたる。本水害支援のほか、アフガニスタン復興支援事業、スリランカ復興支援事業など、主に中央・南アジア各国の支援事業に携わっている。